



Title	日本庭球協会による昭和11年度東海・北陸地方巡回テニスコーチに関する史的考察
Author(s)	後藤, 光将
Citation	明治大学教養論集, 452: 1-22
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/10942">http://hdl.handle.net/10291/10942</a>
Rights	
Issue Date	2010-01-31
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

# 日本庭球協会による 昭和11年度東海・北陸地方 巡回テニスコーチに関する史的考察

後藤光将

## 論文の構成

1. はじめに
  - 1-1. 日本テニス協会所蔵戦前・戦中期資料について
  - 1-2. 巡回テニスコーチについて
  - 1-3. 「昭和十一年度東海・北陸地方巡回コーチ関係」ファイルについて
2. 昭和11年度巡回テニスコーチ
  - 2-1. 日程
  - 2-2. コーチ団と主な関係人物
  - 2-3. 費用
  - 2-4. 目的
  - 2-5. 全日程の概要
    - 2-5-1. 6月4日(木) 第1日目
    - 2-5-2. 6月5日(金) 第2日目
    - 2-5-3. 6月6日(土) 第3日目
    - 2-5-4. 6月7日(日) 第4日目
    - 2-5-5. 6月8日(月) 第5日目
    - 2-5-6. 6月9日(火) 第6日目
    - 2-5-7. 6月10日(水) 第7日目
    - 2-5-8. 6月11日(木) 第8日目
    - 2-5-9. 6月12日(金) 第9日目
    - 2-5-10. 6月13日(土) 第10日目
    - 2-5-11. 6月14日(日) 第11日目
    - 2-5-12. 6月15日(月) 第12日目
    - 2-5-13. 6月16日(火) 第13日目
    - 2-5-14. 6月17日(水) 第14日目
3. まとめ

## 1. はじめに

### 1-1. 日本テニス協会所蔵戦前・戦中期資史料について

大正 11 (1922) 年に発足した財団法人日本テニス協会は、日本のテニスを統轄する唯一の全国組織として普及と強化活動を行ってきた<sup>1)</sup>。特に、発足直後から戦前期にかけて、熊谷一彌、清水善造、佐藤次郎など、国際的に活躍する選手を数多く輩出した。

対米英蘭戦の火ぶたが切られ、敵性文化として外来スポーツが迫害される憂き目にあう中<sup>2)</sup>であっても、国際的な視野を持つ人材を多数有していた日本のテニス関係者は、各種資史料を整理して保存する作業を着実に継続していた。そのため、財団法人日本テニス協会の戦前・戦中期資料の所蔵量は、他の競技団体のそれと比較して極めて多い。しかしながら、それらの貴重な資史料は 60 年以上の年月が経て劣化が著しいため、その恒久的保存(デジタル化)の必要性に直面している。

本研究は、財団法人日本テニス協会が所蔵する戦前・戦中期資史料をデジタル化する一連の作業の部分的成果である<sup>3)</sup>。数多くのファイルを整理する過程で比較的体系的な資史料として認められる「昭和十一年度東海・北陸地方巡回コーチ関係」というファイル(以下、「史料」)に注目する。本研究は、この「史料」をもとに、昭和 11 (1936) 年度の巡回テニスコーチの概要と意義について明らかにすることを目的とする。

### 1-2. 巡回テニスコーチについて

日本庭球協会は、戦前期に普及活動の一環として、地方の中等学校、高等学校、専門学校に関東のトップレベルの選手を一定期間派遣して、模範試合、技術指導などを行わせた。この活動を「巡回テニスコーチ」または「テニス巡業」と称し、第 1 回目は昭和 9 (1934) 年度に行われた。本研究で用いる史料は、昭和 11 (1936) 年度巡回コーチに関するものであり、

昭和 9 年度から数えて 3 回目の試みとなる。第 1 回目は中国・四国・山陰地方<sup>4)</sup>、第 2 回目は北関東および東北地方を巡回した。第 3 回目の昭和 11 年度は、東海・北陸地方を巡回した。

### 1-3. 「昭和十一年度東海・北陸地方巡回コーチ関係」ファイルについて

「史料」は、大きさ A4 版のハードカバーで上製本されている。内部に綴じられているものは、ハガキから B4 版の折り綴じのものまで大小様々であるが、割合としては B5 版のものが多数を占めている。

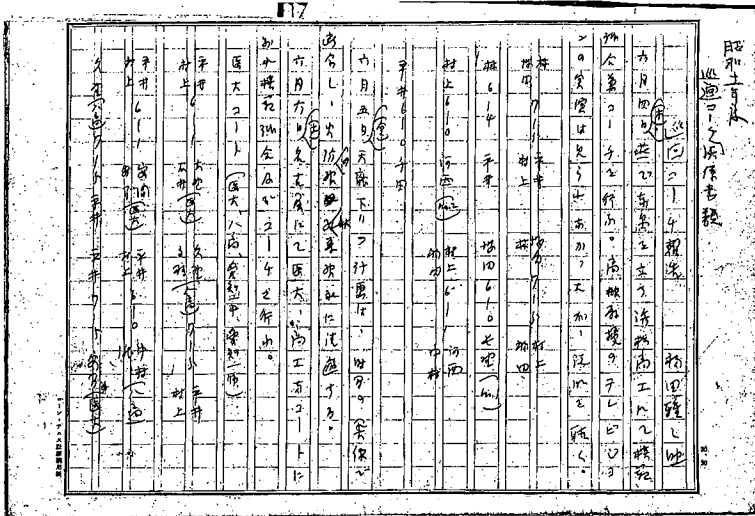


図 1 巡回コーチ報告 (福田監督) (資料番号 25)

総枚数は 69 枚 (重複文書含む)、内容としては日本庭球協会の公文書から費用計算のメモ書きと思われるものまで様々な種類のものが綴じられている。「史料」の中で主なものを以下にあげた。(表 1 参照)

表1 「史料」の主な内容

史料番号	月	日	内容	各頁数
1	5月	不明	日程案	1
2	5月	不明	参考時間表(乗車予定列車時刻一覧)	1
3	5月	不明	予算案	1
4	5月	不明	予算案「備考」	1
5	5月	22日	久保主事から安間氏への書簡1(費用その他について)	6
6	5月	23日	久保主事から福田氏へ監督依頼状	2
7	5月	23日	ボール寄贈依頼	1
8	5月	23日	久保主事から東海支部久野氏への書簡	3
9	5月	23日	久保主事から各コーチへの派遣依頼状	1
10	5月	25日	安間氏から久保主事への書簡(交渉先一覧など)	3
11	5月	25日	久保主事から出野氏への書簡	1
12	5月	25日	久保主事から河崎氏への書簡(ラケット寄贈依頼)	2
13	5月	26日	大澤商会大阪支店より久保主事への書簡	1
14	5月	26日	納品書(セントジェームスボール)	1
15	5月	26日	納品書(三田土ボール)	1
16	5月	27日	久保主事からのボール寄贈お礼	1
17	5月	27日	久保主事からの巡回先学校への依頼状送付報告	1
18	5月	27日	巡回先学校への依頼状	3
19	5月	27日	巡回コーチ交渉先および依頼状送付先控	5
20	5月	28日	久保主事から各県体育主事への書簡	1
21	5月	28日	久保主事から安間氏への書簡2(依頼状送付報告など)	3
22	6月	9日	途中報告	3
23	6月	不明	巡回先へのお礼状(ハガキ)	1
24	6月	23日	巡回先へのお礼状	1
25	6月	不明	巡回コーチ報告(福田監督)	10

## 2. 昭和11年度巡回テニスコーチ

### 2-1. 日程

昭和11(1936)年度巡回コーチの日程は、昭和11年6月4日(木)から6月17日(水)の14日間であった。原則として、日曜日を除いて午後のみコーチを行った。6月5日(金)、9日(火)、12日(金)、15日(月)の4日間は休養日にあてられ観光などを行った。最終日は富山から汽車による帰京のため、丸一日移動日にあてられた。したがって、休養日、移動日を差し引くと、コーチ活動が行われたのは実質9日間であった。

◎ 参 考 時 間 表

日	出発地	出発時刻	到着地	到着時刻
六月四日	豊橋	午前九時(蒸)	静岡	〇時廿二分
	豊橋	〇時廿二分	静岡	〇時廿二分
八日	豊橋	午後八時五分	津市	午後六時五十三分
	豊橋	午後八時五分	津市	午後七時十二分
十日	津市	午前九時廿六分	山田	午後七時廿七分
	津市	午前九時廿六分	山田	午後七時廿七分
十二日	山田	午後五時四十分	岐阜	午後五時五十六分
	山田	午後五時四十分	岐阜	午後五時五十六分
十六日	岐阜	午後五時十五分	米	午後七時三十分
	岐阜	午後五時十五分	米	午後七時三十分
十七日	米	午後七時三十分	高岡	午後八時三十分
	米	午後七時三十分	高岡	午後八時三十分
六月四日	静岡	午前九時	豊橋	〇時廿二分
	静岡	〇時廿二分	豊橋	〇時廿二分
八日	津市	午後六時五十三分	豊橋	午後八時五分
	津市	午後七時十二分	豊橋	午後八時五分
十日	山田	午後七時廿七分	津市	午後九時
	山田	午後七時廿七分	津市	午後九時
十二日	岐阜	午後五時五十六分	米	午後七時三十分
	岐阜	午後五時五十六分	米	午後七時三十分
十六日	米	午後七時三十分	高岡	午後八時三十分
	米	午後七時三十分	高岡	午後八時三十分
十七日	高岡	午後八時三十分	東京	午後十時
	高岡	午後八時三十分	東京	午後十時

図2 参考時間表(乗車予定列車時刻一覧)(史料番号2)

## 2-2. コーチ団と主な関係人物

コーチ団のメンバーは監督として福田雅之助、コーチとして平井俊輔(慶応義塾大学)・林新緑(東京帝国大学)・塚田正友(明治大学)・村上麗藏(慶応義塾大学)の4名であり、いずれも当時の日本学生テニス界の上位選手であった。

- 監督： 福田雅之助
- コーチ： 平井俊輔 (慶応義塾大学)
- 林新緑 (東京帝国大学)
- 塚田正友 (明治大学)

村上麗藏 (慶応義塾大学)

その他、重要な関係者として、日本庭球協会主事の久保圭之助、名古屋医科大学 (名医大) 学生で東海学生庭球連盟幹事長の安間哲文の2名が事前準備で中心的な役割を担った。久保主事は、協会本部責任者として日程計画、予算計画など様々な事を立案して実行した。安間氏は、久保主事と連絡を密にとり、現地で宿の手配や各学校との連絡の役目を担った。

No. 1

昭和 年 月 日	<p>拜啓 巡回の件に因り色々仰有折下りて有難うと          ござす早速岡崎各校庭球部宛に日程買理長下りて文書          願ひ致す</p> <p>一 選手として平井村上坂田林の四君の御座り          構之存じませぬ此の儀の中継の御座り又あるは          一 選手は、藤井君は一切切一任致す          一 選手は、尚右左の二君の御座り          一 監督は、福田君の御座り          一方は、吉澤君の御座り          一 交渉先</p> <p>一 交渉先          一 交渉先          一 交渉先</p>
-------------------	--

全日本学生庭球聯盟東海支部

図3 安間氏から久保主事への書簡 (交渉先一覧など) (史料番号 10)

### 2-3. 費用

当初の予算案において、収入は、日本庭球協会本部からの補助金が 300 円、巡回先の各学校（10 校）から負担金として 15 円宛集め、計 450 円とされた。対して支出は、旅費 100 円（汽車は全て三等運賃として、学生は二割引券を利用）、休養日費用 100 円（1 人 1 日 5 円）、宿泊費用 225 円（1 人 1 泊 3 円、茶代・女中心付等も含む）、雑費 25 円、計 450 円とされた。

収入	本部補助金	300 円
	各地負擔金	150 円（15 円×10 校）
	収入合計	450 円
支出	旅費	100 円
	休養日費用	100 円
	宿泊費用	225 円（1 泊 3 円）
	雑費	25 円
	支出合計	450 円

（史料 3 「予算案」より部分抜粋）

しかし、日本庭球協会の久保主事から現地世話役の名医大の安間氏に送られた書簡（昭和 11 年 5 月 22 日付）によれば、この総予算 450 円では不足の恐れがあり、できれば 550 円に増額したいとの考えを持っていた。

ちなみに、この頃の協会の年間総支出は 6 万円弱であった。最も高額な支出項目がデヴィスカップ戦への海外派遣費用約 2000 円であったとはいえ、財政難であった当時の協会にとって 500 円という金額は決して少ない金額であったと考えられる。

豫算案の旅費は大體宜しくと存候も晝食代、自動車費、女中心付、赤帽費用、ガット代、茶菓子代等多少考慮し置く必要あるに付中學校へ



コーチの場合多少先方より薄謝として費用が出れば尚結構と存候小生の考へでは五百五拾圓位用意して居ないと非常に困りはせぬかと存候へ共少くももう五拾圓位なんとかして出したきものと存候

(史料5 「久保主事から安間氏への書簡1」より部分抜粋)

ボールは、三田土ボール(三田土ゴム製造株式会社)、セントジェームスボール(株式会社大澤商会)、丸菱ボール(桑澤ゴム工業所)の各ボールを10ダース宛販売元から寄贈してもらった。三田土とセントジェームズの2社に関しては、納品書の原本が残されていた。いずれも、金額欄が空欄であったり、「寄付」と記入されていたことから、寄贈されたことがわかる。カワサキラケットへのラケット寄贈依頼文が残されていることから、ラケットも寄贈を受けたと思われる。

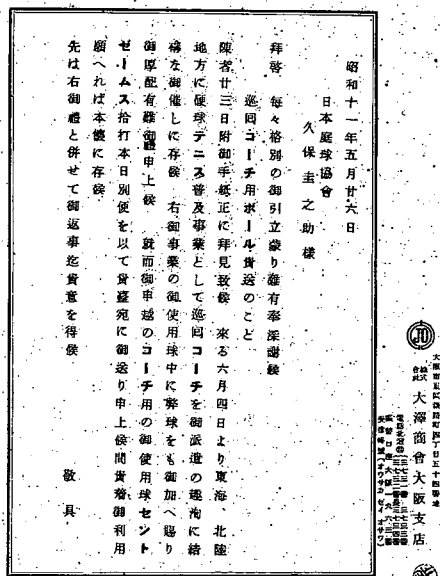


図4 大澤商会大阪支店より久保主事への書簡(史料番号13)

日本庭球協会 昭和11年5月26日

金 大塚市立第一中学校 (印) 大塚市立第一中学校 支店

拜啓毎々御引立受取の儀有難様申上候  
 様比下記之通送付仕候御書付御返候様  
 成下候様迄

月	日	品	名	額	数	現	備	金	備	考
			セントジェームス							
(The rest of the table is mostly blank with a diagonal line drawn through it)										

汽車又ハ汽船 當地取理委託店 當地取理委託店 初 委 託 車

第一銀行支店 三井銀行支店 11-3, 50番  
 取引銀行 住友銀行支店 東京商船行支店  
 取引銀行 三井銀行支店 三井銀行支店

図5 納品書(セントジェームス)(史料番号14)

2-4. 目的

巡回テニスコーチの目的は、一流テニス選手に触れる機会が少ない地方に一流選手を派遣して技術コーチ・模範試合を行うことによって、硬球の普及と宣伝を行うことであった。

当時、高等学校以上のテニス部は軟球から硬球への移行が比較的スムーズに進んでいたが、中等学校のテニス部は都市部を除いて、軟球を採用している学校が多かった。大阪毎日新聞社主催全国中等学校庭球大会(通称浜寺大会)では、昭和7(1932)年度より硬球が採用されたこともあり、日本庭球協会としては、中等学校テニス部の硬球採用を促すことによって普及拡大を狙っていた。つまり、地方で根強い軟球人気を切り崩して、硬球へと移行させる機会の提供がまさに本事業の真の目的であったといえる。

経済的理由で軟球から硬球移行は至難という不安を払拭することにも言

及している。この具体的対策について、使用する用具は全て国産メーカーから寄贈された用具を用いることであった。このことによって、安価で品質の高い国産用具の販売促進に繋げる意図があったと考えられる。

さらに、デヴィスカップなど国際競技としての活躍の場で世界に日本文化を宣揚することができることを利点にあげた。この副次的な理由付けからも、軟球に対する対抗意識は明らかであった。また、地方学校の硬球化を促すことによって、加盟学校数を増加させ協会組織の強化を意図していた。

當協會は本年度國內事業の一として硬球の普及と宣傳の為及一流選手に接觸なき地方へ技術的コーチを兼ね更に硬球に理解なき都市に就ては其妙味を紹介の為エキジビションマッチを舉行する為 (中略) 當協會が巡廻コーチ團を派遣致します目的は硬球の如何なるものであるかを紹介すると同時に日本選手が海外に於て五拾有餘國がテニス技を解し何れもデヴィスカップコンテストに参加し、其制覇に努力することは固より當然であります。之れが為に又スポーツを介して世界的に日本の文化を宣揚して如何に國民外交上重要なる役割を演じて居るかを一般大衆各位に痛感して頂きたいと同時に國産品のラケット、ボールが如何に進歩發達したか、延ひては經濟上至難とされた硬球採用が一步安易となつて來たかをも是非紹介したい一つなのであります。一行の使用せるものは一つとして外國品はありません。而かも性能の優秀なる内地品のみであります。ボールは五圓臺に、ガットは壹圓五拾錢、ラケットは一本五圓と云ふ安價な時代が今や來ました。協會は一步更に經濟的な難關を突破して一般中等學校へ硬球採用の機運に近づかしめんと年來努力しつつあります。而かも内外を統制して庭球王國日本の誇を謳歌したいのが念頭であります。

(史料 18 「巡回先学校への依頼状」より部分抜粋)

大泉君より支部補助金の請求、受領證送附して御請求を賜るやう御手配御下命願上候

又今回のことは支部會員獲得にもなることに付出来れば福井・金澤・富山達へは支部費用にて安間君か長谷川君でも出張して貰ひ加盟勧誘が出来れば幸甚と存居候

(史料 8 「久保主事から東海支部久野氏への書簡」より部分抜粋)

## 2-5. 全日程の概要

「史料」から全行程の概要を整理すると以下のようになる。

### 2-5-1. 6月4日(木)第1日目

6月4日(木)9時00分発急行燕で東京駅を出発した。浜松駅に14時06分に到着した。天候は晴れであった。最初に浜松高等工業学校(浜高工)を来訪した。同校は電気学科助教授高柳健次郎のテレビジョン研究で有名であったことから、一行はまずテレビジョン見学を行った。テレビジョン実演は見られなかったが、その概略を聴くことができた。その後、16時頃から19時頃まで同校テニスコートにてエキシビジョンマッチ及びコーチを行った。参加校は、浜高工、岡崎師範学校(岡崎師)であった。参加予定であった浜松第一中学校は先月起こった大福餅中毒事件(死者44名、患者数2017名)の影響で不参加であった。また、参加予定であった豊橋中学校も不参加であった。在校学生、女学生、一般の来観者が多数あった。終了後、茶話会を同校内で行い、校外に出て参加者達と夕食を共にした。浜松の宿で宿泊した。

第1日目 (6月4日) の試合記録

林・塚田 7-5 平井・村上

塚田・林 7-5 村上・福田

林 6-4 平井

塚田 6-0 毛里 (浜高工 No.1)

村上 6-0 河西 (浜高工 No.2)

村上・福田 6-1 河西・中村

平井 6-0 千田

2-5-2. 6月5日 (金) 第2日目

第2日目の6月5日 (金) は休養・移動日であった。当初の予定では、天竜川下りを予定していたが、舟が出ないため断念した。代わりに自動車に乗って川岸に沿って下り、その後秋葉山に登り、火防 (ひぶせ) の神で有名な秋葉神社に行った。汽車で名古屋へ移動した。22時30分に名古屋駅に到着した。名古屋の宿で宿泊した。

2-5-3. 6月6日 (土) 第3日目

第3日目の6月6日 (土) は、14時から平井・村上が名古屋医科大学 (名医大)、林・塚田が名古屋高等工業学校 (名高工) テニスコートに分かれてエキシビジョンマッチおよびコーチを行った。参加校は、名医大・第八高等学校 (八高)・愛知第一中学 (愛一中)・愛知第一師範学校 (愛一師) の4校が名医大コート、名高工・名古屋高等商業学校 (名高商)・明倫中学 (明倫中) の3校が名高工コートであった。原則として、東海学生を相手に練習試合、中等学校生相手にコーチを行った。東海学生テニス界のスタープレイヤーの八高の久野はシングルスで平井、ダブルスで平井・村上組に勝利するなど非常にレベルの高さを見せつけた。来観者が多数あった。風が非常に強い日であった。19時から名古屋大学

学生ホールにて東海学生庭球連盟主催歓迎会が催された。名古屋の宿で宿泊した。

### 第3日目（6月6日）の試合記録

名医大コート（名医大、八高、愛知一中、愛知一師）

平井・村上 6-1 大野・石井（名医大）

久野・高柳（八高）7-5 平井・村上

平井・村上 6-1 安間・安間（名医大）

平井・村上 6-0 中村・瀧（八高）

久野（八高）7-5 平井

平井 7-5 安間（医大）

平井 7-5 中林（八高）

村上 6-1 高柳（八高）

平井 6-1 中條（愛一中）

平井 6-0 飯尾（愛一中）

名高工コート（名高工、名高商、明倫中）

林・塚田 6-1 法戸・芦矢（名高商）

林・塚田 6-3 法戸（名高商）

林 6-3 芦矢（名高商）

塚田 6-0 隈沢（名高工）

塚田 6-0 濱口（名高工）

林・塚田 6-3 太田・杉浦（明倫中）

塚田・福田 6-3 上田・田村（名高商）

### 2-5-4. 6月7日（日）第4日目

第4日目の6月7日（日）は、午前10時30分から名医大コートにて、

東海学生を相手に練習試合を行った。天候は快晴であった。午後はエキシビジョンマッチを14時より開始し、17時30分に終了した。参加校は前日と同様であった。日曜日ということもあり、多数の来観者が詰めかけテニスコートスタンドを埋めた。19時から名古屋ローンテニス倶楽部主催歓迎会が「かね善」にて催された。今後のテニス普及・進展について熱心に語り合った。名古屋の宿で宿泊した。

第4日目(6月7日)の試合記録

午前コーチの部

林・塚田 6-4 久野・高柳(八高)

平井 6-3 法戸(名高商)

村上 6-2 隈沢(名高工)

平井・村上 6-1 上田・田村(名高商)

塚田 8-6 久野(八高)

林 6-4 安間(医大)

塚田・林 6-2 安間・安間(医大)

平井・村上 6-0 隈沢・表野(名高工)

平井 6-0 上田(名高商)

平井 6-1 田村(名高商)

林 6-2 石井(医大)

塚田 6-1 皆川(愛一師)

塚田・村上 6-4 太田・杉浦(明倫中)

平井・村上 6-2 飯尾・中條(愛一中)

午後エキシビジョンマッチの部

林・塚田 6-2 安間・安間(医大)

村上 6-1 法戸(名高商)

平井 6-0 久野（八高）

塚田 6-4 林

平井・村上 6-2 久野・高柳（八高）

志村・牧野（三菱）6-1 福田・〇〇（稲門）

塚田・林 6-2 6-3 平井・村上

※判読不能の文字は「〇」で記した。

## 2-5-5. 6月8日（月）第5日目

第5日目の6月8日（月）は、起床後汽車に乗り9時12分名古屋駅を出発し、11時12分津駅に到着した。12時から15時まで三重高等農林学校（三高農）テニスコートにてエキシビジョンマッチ、練習試合を行う。学生・社会人の見物が多かった。選手達は熱心にキビキビしていた。コートの手入れに苦心した跡が歴然であった。天候は曇りであった。元慶応庭球部の田所氏が勢南銀行津支店長として参観、肥った姿をコートに見せた。同氏は山田まで同行してくれた。

第5日目（6月8日）の試合記録（三重高等農林学校）

平井・村上 6-4 6-4 塚田・林

平井 7-7 林

福田・村上 6-0 八木・鈴木（三高農）

塚田・林 6-1 〇〇・〇〇（三高農）

平井 6-0 佐野（三高農）

林 6-1 益満（三高農）

塚田 6-0 宮田（三高農）

※判読不能の文字は「〇」で記した。

15時32分津駅発の汽車に乗り、16時30分山田駅に到着した。17時



から 19 時まで神宮皇學館テニスコートにてエキシビジョンマッチ、練習試合を行う。鳥羽の宿で宿泊した。夕食では海の幸を満喫した。

第 5 日目 (6 月 8 日) の試合記録 (神宮皇學館)

平井・塚田 6-2 林・村上

村上・塚田 8-6 林・平井

林・塚田 6-4 平井・村上

村上・塚田 3-0 小野・宝子丸 (皇學館)

村上・塚田 3-0 小島・久保田 (皇學館)

2-5-6. 6 月 9 日 (火) 第 6 日目

第 6 日目の 6 月 9 日 (火) は、2 度目の休養・移動日であった。天候は小雨であった。観光としてまず、伊勢の真珠工場を見学した。皇學館の高柳氏の案内で伊勢神宮の徴古館を見てから内宮を参拝した。小学校の団体が多かった。次いで外宮を参拝し、伊勢参拝を終わり、夕方の汽車で名古屋に戻った。名古屋の宿で宿泊した。

2-5-7. 6 月 10 日 (水) 第 7 日目

第 7 日目の 6 月 10 日 (水) は、朝に名古屋から汽車に乗り岐阜へ向かった。午後から岐阜薬学専門学校 (岐阜薬専) コートにおいて、岐阜薬専、岐阜。商業学校 (岐阜商) をコーチした。夜に、岐阜で歓迎会があった。岐阜の宿で宿泊した。

第 7 日目 (6 月 10 日) の試合記録

平井・村上 6-2 6-3 林・塚田

平井 6-6 塚田

福田・村上 6-2 福田・柴田 (岐阜薬専 No. 1)

林・塚田 6-0 野田・東原（岐阜薬専 No.2）

平井・村上 6-0 岩淵・東（岐阜薬専）

村上・福田 6-1 瀬川・伊吹（岐阜商）

林 6-0 柴田（岐阜薬専）

平井 6-0 福田（岐阜薬専）

塚田 6-0 東原（岐阜薬専）

## 2-5-8. 6月11日（木）第8日目

第8日目の6月11日（木）は、午後に一宮中学校（一宮中）に向かった。全校生徒、および一部の社会人が同校講堂に集った。校長先生の司会で福田監督は、デ盃戦について講演を行った。同校のテニスコートは、バックストップのついた3面の立派なコートであった。庭球部員数は40名、熱心な同校教諭森田部長の尽力の賜であった。大阪毎日新聞社主催全国中等学校庭球大会（通称浜寺大会）が昭和7（1932）年に硬球化したのを機に硬球を採用して今日に至った。東洋紡、東部宅などの社会人の見物が多数あった。夜に同校食堂で校長先生はじめ社会人有志による歓迎会が催された。岐阜の宿で宿泊した。

### 第8日目（6月11日）の試合記録

平井・村上 8-8 林・塚田

村上・福田 6-2 林・塚田

村上・福田 6-0 今枝・服部（一宮中）

林 6-2 平井

塚田・林 6-3 平井・村上

村上・林 6-0 中島・安部（一宮中）

### 2-5-9. 6月12日(金)第9日目

第9日目の6月12日(金)は、3度目の休養日であった。観光として、日本ライン下りと犬山城を見物した。ライン川下りは評判程の事ではなかった。宿へ帰って来た後、予定外であったが岐阜商業の依頼により同校へ赴きコーチをする。浜寺出場の為にはよい練習となったようであった。三年生の高栴君が有望選手であった。夜、安島先輩、高柳部長の案内で鵜飼を見物した。岐阜の宿で宿泊した。

### 2-5-10. 6月13日(土)第10日目

第10日目の6月13日(土)は、朝汽車に乗って岐阜を立って福井へ向かった。午後から福井高等工業学校(福高工)でコーチを行った。見物人は割合に少なかった。気候が悪く練習が思うように出来ないとのこと、勸業銀行の人達が平井氏に熱心に質問していた。福井は硬球よりも断然軟球が盛んということであった。防空演習で燈火管制のため暗かったが、歓迎会が催された。芦原温泉の宿で宿泊した。芦原温泉も暗かった。

#### 第10日目(6月13日)の試合記録

林・塚田 6-4 平井・村上

福田・村上 6-0 ○谷・永○(福高工) No.1

塚田 6-2 平井

福田・林 太田・西村(福高工) No.2

平井・村上 6-6 林・塚田

※判読不能の文字は「○」で記した。

### 2-5-11. 6月14日(日)第11日目

第11日目の6月14日(日)は、朝に芦原温泉を発ち、金沢駅に10

時 55 分に到着した。出迎えから、フィルムを持って来ない、時間通りに来ないと不服をいわれた。金沢医科大学（金医大）、第四高等学校（四高）、金沢高等工業学校（金高工）の部長、選手一同の盛大な午餐会が催された。午後から四高コートでテニスを行った。金医大の酒井氏、金高工の清水氏は相当な腕を持った選手であった。夜に茶話会を催してもらい、テニスの質問を訊いた。その後、尾山神社の祭りで賑かな町を散歩した。金沢の宿で宿泊した。

#### 第 11 日目（6 月 14 日）の試合記録

林 10-8 平井

塚田 6-0 村上

福田・村上 6-2 太田・酒井（金医大）

平井 7-5 林

塚田 6-0 清水

村上 6-0 山田（四高）

林・福田 6-0 小菅・橘（金高工）

#### 2-5-12. 6 月 15 日（月）第 12 日目

第 12 日目の 6 月 15 日（月）は、4 度目の休養・移動日であった。観光として、兼六園を見物した。その後、午後には金沢を発ち黒部峡谷口の宇奈月へ向かった。黒部峡谷を見渡す旅館で静養した。宇奈月の宿で宿泊した。

#### 2-5-13. 6 月 16 日（火）第 13 日目

第 13 日目の 6 月 16 日（火）は、午前に観光、午後にコーチを行った。午前は、鍾釣温泉まで黒部川を遡り、黒部の溪谷点を満喫した。午後は、高岡の高岡高等商業学校（高岡高商）コートと富山の富山薬学専門学校

(富山薬専) コートに分かれて練習試合・コーチをした。有名な高岡高等商業学校の山田選手相手に平井はセットポイントを掴まれたが、7-5、6-4 で辛勝した。同校部員は、ファイトの盛んな応援であった。

富山薬専コートには元一高の選手などが見えていた。野口庭球部長はじめ先輩の方々による歓迎会が催された。富山の宿で宿泊した。

### 2-5-14. 6月17日(水) 第14日目

最終日第14日目の6月17日(水)は、帰京のための移動日にあてられた。実質の巡回コーチは前日の高岡・富山をもって終了した。午前富山を出発して、直江津駅で乗り換え、夜に上野駅に到着して解散となった。

### 3. まとめ

昭和11(1936)年度の東海・北陸地方への巡回テニスコーチは、日本庭球協会の久保主事が中心となって、具体的な連絡や交渉が行われた。しかし、それらの主な交渉は、直前の2週間程度という短期間で行われた。それにも拘わらず、ほぼ予定通りに滞りなく日程をこなすことができた。これは、昭和9(1934)年度からの恒例行事として経験の蓄積があったことが大きな理由と考えられる。また、天候に恵まれたことも幸いしたと思われるが、各地で多くの観客を集め、連日のように歓迎会を催してもらったことから、各地での積極的な受け入れ体制が十分整っていたことも背景にあると思われる。

各学校選手にしても、8月に行われる全国高専大会、全国中等学校大会に向けての良い練習機会となったようであった。特に、北陸地方では、10年以上一流の選手が来なかったということで非常に感謝された。そのためもあってか、北陸の学校は負担金15円の他に旅費補助として10円をコーチ団に寄付した。

日本庭球協会にとって本事業は、国内事業の一環として硬球の底辺拡大を狙った重要な施策として成功したといえる。しかし、翌年の昭和12(1937)年から支那事変(日中戦争)が起り、生ゴムの供給統制が行われたことによって、昭和13(1938)年からテニスボールが配給制となる。テニス界も戦争の波に吞まれていくなかで、安価で高品質な国産テニス用具の供給体制は次第に崩れていき、日本庭球協会のテニス普及活動はいつしかテニス存続活動へとかたちを変えていくのであった。これらその後の展開から、昭和11(1936)年度の東海・北陸地方巡回テニスコーチは、戦前・戦中期における最後の効果的な国内テニス普及事業であったと位置づけられる。

表2 全日程訪問先一覧

月日(曜日)	訪問都市(学校)	参加校名	宿泊地
1日目 6月4日(木)	東京駅発 浜松(浜高工)	浜高工・岡崎師	浜松
2日目 6月5日(金)	休養日(秋葉神社)	名古屋移動	名古屋
3日目 6月6日(土)	名古屋(名医大) 名古屋(名高工)	名医大・八高・愛一中・愛一師 名高工・名高商・明倫中	名古屋
4日目 6月7日(日)	名古屋(名医大)	名医大・八高・愛一中・愛一師・ 名高工・名高商・明倫中	名古屋
5日目 6月8日(月)	津(三高農) 山田(皇學館)	三高農 神宮皇學館	山田
6日目 6月9日(火)	休養日(真珠工場・伊勢参り)	名古屋移動	名古屋
7日目 6月10日(水)	岐阜(岐阜薬専)	岐阜薬専・岐阜商	岐阜
8日目 6月11日(木)	一宮(一宮中)	一宮中	岐阜
9日目 6月12日(金)	休養日(日本ライン下り・犬山城・鶴飼見学)		岐阜
10日目 6月13日(土)	福井(福高工)	福高工	芦原温泉
11日目 6月14日(日)	金沢(四高)	四高・金医大・金高工	金沢
12日目 6月15日(月)	休養日(兼六園・宇奈月温泉)		宇奈月温泉
13日目 6月16日(火)	高岡(高岡高商) 富山(富山薬専)	高岡高商 富山薬専	富山
14日目 6月17日(水)	富山-直江津-上野		

## 謝辞

本研究で用いた史料(昭和十一年度東海・北陸地方巡回コーチ関係)を利用するにあたって、財団法人日本テニス協会の多くの方々、特にテニス

ミュージアム委員会の小田晶子委員長、岡田邦子委員には大変お世話になりました。心から感謝いたしております。

《註および引用文献》

- 1) 発足当初の名称は「日本庭球協会」(昭和17～20年は大日本体育会庭球部会)、1980年から財団法人化され、「日本テニス協会」となった。
- 2) テニスにおいては、昭和17年から用語、ルールの邦語化が行われ、戦時体制が強化されていくなかで、テニス活動を存続させる防波堤の役割を担った。詳しくは拙稿、後藤光将「テニス用語の邦語化に関する研究」、明治大学教養論集440号、1-14頁、2009年を参照。
- 3) 本研究は、「戦前の日本庭球協会および大日本体育会庭球部会資料のデジタル化とその総合的研究」(明治大学研究知財戦略機構2008年度若手研究)の部分的成果である。
- 4) 第1回目は、昭和9年7月10日から21日まで行われ、日本庭球協会中国支部管内(中国・四国・山陰)を巡回した。日本庭球協会・全日本学生庭球連盟編「日本庭球年鑑 昭和九年度」昭和10(1935)年、133頁より

(ごとう・みつまさ 政治経済学部専任講師)